

園のおたより



第 1 号

令和 8 年 4 月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

年度のはじめに（自己紹介を兼ねて）

園長 大向 隆三

春のやわらかな陽ざしに包まれ、新しい令和8年度が始まりました。ご入園・ご進級、誠にありがとうございます。こどもたち一人ひとりが、新しい環境の中で期待と少しの不安を胸に、この日を迎えたことと思います。心よりお祝い申し上げます。

このたび、ご縁をいただき、本園の園長を拝命いたしました。微力ではございますが、こどもたちの健やかな成長のため教職員一同と力を合わせて努力する所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

少しだけ自己紹介をさせて下さい。私の出身は兵庫県で、大学院を修了して国の研究機関で勤務したあと、埼玉大学に着任しました。大学では私の専門である物理学、特に光の研究を、熱意ある学生と一緒に取り組んでいます。埼玉大学の公式YouTubeチャンネルで私の研究の簡単な紹介動画（「光の不思議 光の魅力」）があるので、もしお時間があればぜひ一度ご覧ください。

園長の仕事をお引き受けするにあたり、私が幼稚園に通っていたときの思い出を振り返ってみました。最初はなかなか思い出せなかったのですが、なんとか振り絞ってみると、母に連れられて恐る恐る登園したこと、プールでの水遊びで大はしゃぎしたこと、学芸会で「ながいながいペンギンの話」の劇をしたことなどを次々に思い出しました。自分でも驚いたのは、今でもその幼稚園の園歌を歌えたことです。今まであまり意識していませんでしたが、50年以上の時間が経過しても幼稚園で学んだことは私の心の中に生きているようです。

新学期が始まって、園庭で遊ぶこどもたちの様子は澁刺としています。ただ、新しい環境に慣れるまでの間は、家に帰って不安や戸惑いの気持ちを表に出す場面があるかもしれません。その一つひとつの経験を大きな成長へとつなげられるよう私たちはこどもたちの思いをしっかりと受け止め、安心して過ごせるよう支えてまいりますので、ご家庭でも温かく見守っていただければ幸いです。

一年間、こどもたちが笑顔で園生活を送り、「楽しかった」と感じられる毎日となるよう努めてまいります。保護者の皆様のご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



軽やかさ

副園長 小谷 宜路

今月入園した1組の部屋から、幼稚園の歌が聴こえてきました。こどもたちは「ようちえんのうた」という曲の題名ではなく、3番まで繰り返し出てくる「うらうら」の歌として、愛着をもったようです。「“うらうら”歌おう」と、とても嬉しそうな人もいます。「♪うらうら うらわの」と曲の冒頭に出てくるリズムカルな歌詞と旋律に、軽やかさも感じているようです。園のみんなで集まる式やこども会などの行事には、みんなで一緒によく歌う曲でもあり、軽やかさを共にできる曲です。4月に入園した人たちも、進級した人たちも、新しい生活の仕方、新しい場所、新たな人との出会いに、緊張して心も体も硬くなることがあると思いますが、歌う場面に限らず、少しずつそれぞれの軽やかさを発揮しているようにも感じています。

今月は、園庭で遊ぶことが心地よい陽気が続きました。こどもたちが自然と靴や靴下を脱ぎ、素足で園庭に出ることが増えてきています。芝生の上を素足で駆け回っている姿は、芝生に触れる足の裏だけでなく、全身が軽やかになっているように見えます。また、大きな砂場や園庭にある土のスペースに素足ででかける時は、大胆に力強い足元に加え、心も体も軽やかになっている様子があります。これまで私が保育の仕事に携わる中で、長い間、「裸足」という言葉で書き留めることをしてきました。数年前、とある原稿を書く機会があり、他の幼稚園の先生から「素足」という書き方をされていることを教えていただきました。実際の日々の園生活では、「裸足になろうよ」などと「裸足」という言葉を使うことが主です。裸足でも素足でも大差はないかも知れませんが、「裸足」という語感からは力強さを、「素足」という語感からは軽やかさを受けました。こどもたちの動きにある軽やかさを表現するには、「裸足」よりも「素足」のほうが合っているように感じ、その後は「素足」と書き表すようになりました。

毎日の暮らしの中では、いろいろな気持ちになり、その気持ちが体の動きに繋がったり、体の様子が気持ちの変化に繋がったりします。こどもたちも大人も、常に軽やかに過ごせるばかりではないでしょうが、それぞれの軽やかさをもって暮らしていけることを願っています。こどもたちが季節ごとの空気をいっぱいを感じつつ、軽やかな毎日を送ることができるよう、今年度の一年間も丁寧な保育を進めていきたいと考えています。





1くみ

「歓声と休息」

21人での生活が始まりました。こどもたちは新しい環境で、新しい人たちと生活することに、いろいろな気持ちをもっています。幼稚園で迎える側として、何か一つでも、「これ面白いな」「触ってみようかな」などこどもたちの心が動くようなことがあると嬉しく思います。

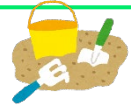
初めて園庭で素足になって遊んだ時のことです。素足の感覚が嬉しい人たちは夢中になって砂に触れたり、足をうずめたりして感触を喜びました。靴を履いて遊ぶのが好きな人たちは、芝生の上を駆けたりブランコに乗ったりしていました。ふいに砂場で遊ぶ人が、たくさん砂の付いた手を持ち上げて「おばけの手だよ」といいました。それを近くで見て聞いていた靴を履いた2人は、「キャー」と歓声を挙げてブランコの方に走り出しました。担任が「おばけの手」で二人を追いかけるとたくさんの「おばけの手」の人たちも次々と追いかけ始めました。2人は一生懸命逃げましたが、ついには追いつかれてしまいました。「おばけの手」の人たちは本当にその手で捕まえたら友達が嫌なことに気付いているようで、触らずに近くで「おばけの手」を見せて、お互いになっこり笑い合いました。それぞれが感じている砂場でダイナミックに遊ぶ楽しさ、芝生を思い切り駆ける楽しさがこの一瞬に重なったような気がしました。

活発に過ごすだけでなく、幼稚園ではほっと一息つけるような時間も大切にしています。園庭に出てよく遊ぶようになってからは、水分補給のために、降園前、白湯を飲む時間を設けています。同じやかんの白湯をみんなで分け合って、「いただきます」の挨拶をして飲みます。同じテーブルの人と「乾杯」をする人もいれば、「おかわり！」と嬉しそうにたくさん飲む人もいます。来月にはお弁当も始まりますが、家庭から一歩出た生活の中で、誰かと一緒にほっとしたり、嬉しさを感じたりするようなひとときをこれからももちたいと思います。





2くみ



「楽しさが広がる」

新しい2組での生活もあっという間に1か月が経とうとしています。初めはお互いを「あの子」と言っていた2組のみんなも、一緒に生活する時間が増えていく中で「ooちゃん」「ooくん」と友達の名前を呼ぶ声を耳にすることが増え、少しずつ2組の場や友達と過ごすことを“楽しい”と感じているような姿があります。

天気がよい日には着替え終わるとすぐに園庭に出かけ、虫を探したり、砂場で電車に見立てた木片を走らせたり、遊具で体を動かしたり、春の心地よさを感じながら戸外で過ごすことを楽しんでいきます。ある日、登園するとすぐに「今日はねお砂場で水を流したいんだよね。お水流してもいいかな」と相談しに来る人がいました。水を使えるようにすると、まずはバケツを使って一人で水を流し始めます。しかし、一人でやってもあまり面白くない様子でした。そこに、水を流すことを手伝ってくれる人が現れました。2人になると流れる水の量が多くなり、たらいから水を汲んでは流すことを何度も繰り返し、砂場がどんどん濡れていきます。しかし、イメージしていた“水を流す”ではなく「明日もやるんだ」と次の日に続きをやることになりました。次の日、予め溝を少し作っておいてみるとバケツで水を流し、「流れた！もう一回流そう」と嬉しそうな声が砂場に響きました。一人、また一人と砂場に人が増えていき、水を流したり、新しい道ができたりしていきます。「そうだ。裸足になったらいいんだ」と一人が素足になると、他の人も次々に素足になりダイナミックに“工事”が進んでいきます。それぞれが感じた水の冷たさや泥の心地よさを言葉や表情、動きで表し、友達がやっていることを一緒にやってみながら全身泥だらけになって工事を楽しみました。遊んでいる時のつぶやきは誰かに向けたものではなかったけれど、それが近くにいた人まで届き、それぞれの思いが自然と伝播することで、楽しさがより大きくなっているようでした。

一人一人が見つけた楽しい気持ちを大切にしながら、2組のみんなが“楽しさ”を分かち合いながら過ごしていきたいと思っています。



3くみ

「1人1人の心のこと」



ある日のこと、気の合う友達と四つ葉のクローバーを探す人たちがいました。2組の時いつもやぐらの下にあったはずなのに、なかよしグループからなかったようです。するとAさんが「あ！これ！四つ葉のクローバーだったかもしれないやつだ！」と。三つ葉なのですが、葉が等間隔でなく少し隙間が空いていたから、そこにもう一枚の葉っぱがあったに違いないとのことでした。Bさんも「あ！これも四つ葉だったかもしれないやつだ」と大喜び。四つ葉を探すことって、例え四つ葉でなくても、誰かと一緒に探すことそのものが、すでに幸せなのではないか、互いに目を合わせるわけでなく、ひたすらに下を向いて黙々と探しているのにも関わらず。素敵だと思いました。

さて、新しい友達や2組になった友達に何か贈り物をしようと、自分や自分たちができることを考えて、ペンダントを作りました。3組になかよしグループの人が2人の場合は、1人で1人分を作ります。でも、1人の場合には3人分作ることにになります。それでも「これは〇〇ちゃんにあげるんだ」と心を込めて作っていました。使った折り紙の枚数やペンの色数など、目に見えるところでは伝わりにくいこともありますが、一生懸命に作る姿に心を打たれました。仲良しになる言葉と共にペンダントを贈り、会の後に聴いてみると「喜んでくれた（相手をどう見たか）。嬉しかった（自分が感じたこと）」「ありがとうって言ってくれた（相手から受け取ったこと）。びっくりした（自分が感じたこと）」など嬉しそうに話す人がありました。すると「あのね、プレゼントしたんだけど、ありがとうとか、嬉しそうなお顔とかしていなかったんだよ（相手から受け取ったこと、自分が感じたこと）。」と少し残念そうに話してくれた人がありました。「わたしもそうだったよ！（相手から受け取ったこと）」と応えた人もいました。わたしが「どうしてだろうね」と呟くと、他のみんなも考えている姿があり、「わたし、ありがとうって3歳の時言えなかったかも」「嬉しいけど、そんなお顔しない人もいるんだね」と伝えてくれる姿もありました。自分がしたことに対してどのようなことが返ってくるのか、想像と同じだったか違ったか、どのように感じたか・相手の思いは目で確認することは難しいことを感じた大切な機会だったようです。「見えない心の目をどのように見るか」これからの人生に必要な心を大切にしていきたいです。